

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成17年  
11月号

毎月23日発行  
通巻423号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成17年11月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷株式会社  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



富雄南小学校運動会にて (H17・10・1) 青山法義さん撮影

## ワークキャンプと大倭 その出逢いの頃

古参キャンパーの昔話

杉 浩 史 (茨木市在住)

ワークキャンプ来る  
法主 矢追日聖  
昭和40年9月大倭新聞より  
(『やわらぎの黙示』231頁)  
三十七年十一月二十二日、FIWC  
(フレンズ国際労働キャンプ) 関西委員  
会の学生達が、苑の第三次増築の折、大  
倭で初のワークキャンプをもった。これ  
をきっかけに大倭は若返る雰囲気になり  
つつあった。  
大倭との結びつきに関しては、学生達  
は何も知らなかっただろうが、この現実  
は来たる四十年にそなえての神慮であっ  
たことに相違なかった。(……中略……)  
今から千二百五十年の昔、この地は悲  
田院、施業院の旧蹟と伝えてきた所だっ  
たので、大倭十年にして悲田院に該当す  
る救護施設が生まれたことは、むしろ当  
然のような気がしたのである。一方の癩  
者救済は癩予防法があるからには、おそ  
らく今世はこの地に縁がないだろうと、  
人間心でひそかに思っていたのだが、三  
十八年九月の月次祭に、鶴見俊輔氏の意  
思を戴いて柴地則之キャンパーが癩回復  
者の宿泊所建設の問題を持ち込んでき  
た。次の十年目即ち四十年には、光明皇  
后は何をなさるつもりかな、と時折思い  
浮かべたことなどがあったので、遠慮が  
ちに解説調で話しかける彼の態度に同情  
するような気持ちで聞いていると、皇后さ  
んの明るい微笑が前をかすめたりするの  
で、いろいろな意味を含めて笑いが暫く  
止まらなかった。来るべきものが来たと  
いう実感以外は何もなかった。

「S37・11・22、FIWC安宿苑キャンプ前日の集まり」とメモのある古い録音テープを、編集部IT担当の齋藤正宏さん等が聞ける状態にしてくれました。多分、旧拜殿での教修会（月次祭前夜に行われていた邑人の集まり）で、紹介をしあっているところらしく、双方はあまりかみあっていないような感じ。このキャンプの計画段階に係わりの深かった杉さんに聞いてもらい、当時のことを書いて頂きました。（編集部・岸野春子）

## 一、私見・FIWCとは

一九六一（S三六）年五月、身体障害者の授産施設 宝塚「希望の家」キャンプが、私の蒼き時代、一八歳のワーク キャンプ初体験である。

中学 高校と六年間、男子ばかりの学校で過ごした私にとって、それは大別して三つの意味で、新鮮かつ、衝撃的な体験であった。言わばカルチャー ショックそのものであった。

一つは身体に障害を持つ人との近しい接触の経験など、それまでには全く無くて、どのように向き合えばよいのか、何の心構えも無いピッカピカの大学一年生の私は、耳の不自由な人との初めての出会いで、たわいもなく打ちのめされたのが、衝撃体験の一つ目である。

その方は耳が不自由なのであるから、自分の声も勿論聞き取れない。見よう見まねの口の開け方の訓練で、どうにかこうにか発声は出来るが、当然ながら発音がいささか不正確になる。たったそれだけのことで、それはそれはひどい「差別と偏見」の中で過ごさざるを得なかった半生を聞くに及んで、不覚にも私は、人前はばからず落涙 嗚咽してしまったのであった。

そして二つ目。特に軽んじていたワケではなからうと思うが、私の育った家庭は、仏壇も神棚も

無い、宗教的気配のすこぶる希薄な家庭であったがために、キャンプでの初めての就寝前、徹か友愛に満ちた（？）宗教的なその雰囲気戸惑いを覚えたことである。そしてこの戸惑いと共に、憧れにも似た清新なものと感ずる私の感性を呼び覚ますのにさほどの時間を要しなかった。

当時のFIWC（※1）の活動は、「アメリカフレレンズ奉仕団（AFSC）」の影響を色濃く残しており、夜の全体プログラムの最後で夜毎、実施された「Dona Nodis Pacem（我等に平和を」ラテン語）」の合唱（これは全員が車座になり、両腕を胸の前でクロスし、隣りあった者がそれぞれ手をつなぎ、一つの「輪」和）になって唄う）と、その後のメデイテーション（瞑想）※2……。

他の人のことは判らないが、純情で世間知らずの私にとって、それは全く未体験、したがって新鮮な感覚で、友愛の気持ちと同時に何ものにも替え難い一体感を感じさせるものであった。もともとそれは今のワーク キャンプでは全く実施されていないようであるが……。

三つ目は、少し下世話な話になるが、夢多き思春期を男子ばかりで過ごした初々しい一八歳。異性と起居を含めて日夜、活動を共にする……：妙な解釈をされても困るが、たったこれだけのことで、気持ちの平静を装うのに努力を要するような、いささかの興奮を覚えたものである。ただこれは男女共学の経験のある人にとっては、その感覚自体が「信じられない」ことであるのを知ったのは、その後すぐのことではあるが（恥ずかしながらこの私は、実に徹底した異性音痴であった）。

下世話ではあるが、この三つ目の感覚は、いつの時代であっても、こうしたボランティア活動（この言葉は、当時一般にはさほど使われておらず、私達のグループが最も早く使い出したうちの

一つであったと思う）の根源的なコンセプトの一つである。この男女のバランスという要件が満たされていないければ、いざい活動のエネルギーは下降曲線を辿る。実際、この大倭の地で、「交流の家」の運動が始まる前の一時期、委員会を招集しても皆目、委員が集まらず、関西委員会を開催できないような、危機的な組織状況に立ち至ったことが、ままたったのも事実だ。

ともあれ、この乙女と男子の混在のバランスという命題こそが、結果的には私達のグループがその後、此処、大倭に近づくことになる主要な因子になるのである。

※1 FIWC (Friends International Work Camp)の略。「フレレンズ」というのはクエーカー教とも呼ばれ、キリスト教プロテスタントの一派。一七世紀半ば、英国でジョージ フォックスが創始。程なく米国に広まり、キリストへの信仰により、神の力は心の内に働くとし、霊的体験を重んじ、教会の制度化 儀式化に反対し、絶対的平和主義を主張（日本の憲法九条に近い）。両世界大戦にも反対し、アメリカでも「良心的兵役拒否」を貫き、むしろそのことのために刑に服すること、しばしば話題になる。クエイク (Quake) は震えるという意味だが、これはここ大倭で言う霊動と同質のもの、と私は考えている。（参考資料 小学館発行『大辞泉』）

※2 黙禱とは、似て非なるもので、私と同期の仲間 三木善彦（大阪大学人間科学部名誉教授、奈良市学園大和町在住）が唱える「内観」に近いが、キャンプの中では、時間に限りがあり、内観ほどに掘り下げるのは、難しい。

## 一、大倭安宿苑へ

その後の活動は、①大阪 吹田の「スラム ク

リアランス」キャンプ、②廃校になった小学校の校舎を身体障害者の施設に改造する「金沢キャンプ」、そして山村工作隊でもないが日本の農業の明日を見つめて③京都府下 南端の「南山城キャンプ」、④兵庫県三木市（小野市？）での「実験農場（パイロットファーム）キャンプ」……と勢力的に活動を続けた。

ところで、私が参加した頃の当初の構成は、殆んどが神戸大 神戸女学院 関学 甲南など阪神間の大学生で、阪大 京大 立命館などのメンバーもいるにはいたが多数派ではなく、少し遅れて同志社と京大の新左翼（くずれ？）のメンバーが合流して、その後のキャンプの性格付けに大きく影響を及ぼすことになっていった。

この私めもその内の一人であったので、新左翼くずれの合流のことを過大に言うのは、何としてでも避けたいところだが、現在のワーク キャンプという組織とその活動にとつて、良かったのか悪かったのか判らないが、やはり少なからぬ影響を与えてしまったと思っている。

結果、立ち至った変化というか、変質というか、これを明らかにするのは、骨の折れる作業である。キリスト者特有の博愛 人道主義も、新左翼と同様に「世直し」の思想は共有している（ように思える）。ところが見つめている目線が全く異なる。頭でっかちの新左翼は山のとっぺんを常に見つめているが、キリスト者は直ぐ横の草木を見つめているような……。

こうしたことで、本当に飽きもせず、よく議論をしたものだった。ところがドッコイ、実はこれは先述の変化の本質では全く無い（と思つてゐる）。誤解を恐れずに言つてしまうと、こういうことだ。

ちよつとびり宗教的雰囲気を伴つたお行儀の良い

良家の子弟達の集まりが、ちよつと品のよろしく無い、男臭い集団へと変質していったのである。異論を唱える向きもあるかも知れないが、私は当時の変化を確信をもつて、こう捉えている。そして今にして思えば徐々に、ではあるが、同時並行的に宗教的雰囲気は希薄になっていったような、私はそんな気がしている。それまでの、特に女子学生が、一人去り、二人去り、していったのは、ある種当然の帰結であつた（つまるところ、私達はよつぽどガラが悪かつたのかも知れない）。

そこで私達は次の策を考えた。六二（S三七）年 夏のキャンプで、新しく奈良女子大学のメンバーをほんの数名、ゲット出来たのをキツカケに、奈良女をオルグ（決してナンパではない）して、女子の不足を補い、組織の活性化を図ろうとしたのである。そのためには何としてでも、キャンプサイトを奈良に求めなくては……。

まあ、それにしても、いささか不純な動機（？）の感を拭い切れないが、かくして白石芳弘（京大）と南部宏子（奈良女）、私（同志社）と田中久美（奈良女）の同期の二年生が二組に分かれて、それぞれ奈良県庁と奈良市役所を訪問。

結果、心身障害者の救護施設「大倭安宿苑」に辿り着くことになつたのであつた。FIWC関西委員会と大倭との歴史の出逢いである。その後、四〇年を超える付き合いになるなど、その時、一体誰が考えたことだろう。

### 三、キャンプから邑人へ

さて、こうした出逢いであるから大倭との接点も、当初は私達にとつては、あくまでも社会福祉法人の大倭安宿苑であり、接触の当事者は今井富蔵苑長、その人であつた。この安宿苑が、大倭教という宗教上の理念によつて支えられていると、

説明を聞かされても、「はあー、そうですか。」といったのが、私の場合の当初の反応ではなかつたか、と思う。

その後、この（やすやど苑ではない）安宿苑の名が、聖武天皇の后 光明皇后の幼名 藤原安宿媛（※3）に由来し、ここ大倭の地がその光明皇后が自から尽力された「悲田院」「施薬院」「療病院」（※4）の伝承の地であること。しかもそこへ、後にハンセン病快復者を含めた人的交流のため「交流の家」の建設及び、その活動主体のための拠点づくりになっていったという事実は、余りにも運命的である。

この交流の家の建設開始に至る経過自体は、本紙読者や多くのキャンプパーにとつて、周知のことなので、ここでは記述を省く。

キャンプ自体の活動を進めていく過程で、柴地則之を中心としたキャンプを主導していたメンバーと大倭は、その蜜月を更に深める。キャンプの中で、大倭の邑人としての行動に軸足をシフトさせていくグループが出て来たのであつた。正しく神のみぞ知る、運命的な関係に至る。

六四（S三九）年の六月、香月寿 平山久 柴地則之 杉本順一、そしてこの私の五名が「入植」を果たしたのである。こここのころの私達の心の動きを記憶から記録へと筆を進めなければならぬが、ぼつぼつ紙数が気にかかりだしてきた。

私達は大倭のことで言えば、自然の理をそのまま受け入れようとする、アニミズムに近い宗教的要素とは別に、一門が一つの財布で賄われている共同体（＝大倭あじさい邑）の実践場であることに魅かれる部分が大きかつた。ちよつと乱暴な言い方で直言してしまうと、当時の私のような単細胞思考では、原始共産主義の理念を純粹培養していけば、「ユートピアズム＝共同体主義」に行き着

かざるを得ないのであった。

その「ユートピア」というものに思考が到達した瞬間、正しく目からウロコ。血みどろの政治闘争が「何と下品なものか」と思えてきたのである。もともとこの感覚は、必ずしも五名に共有のものではなく、私特有のものかも知れないが……。

※3 七〇一〜七六〇。藤原不比等の三女で、皇太子時代の聖武天皇と結婚。信心深く、慈悲の心豊かで、病人のウミを口で吸い取って看護したという伝説を持つ。

※4 「悲田院」では身寄りの無い老人や孤児を養い、「施薬院」では病人に薬を与え、「療病院」は文字通り、病人の世話をするところである。すべて無料で、光明皇后は自から進んで、今言う看護師役を担ったという。

#### 四、「神の子」への出発

それにしても矢追日聖法主の懐の深さとは、一体どういうものなのであろう。ここ大倭あじさい邑は一般的に言えば、日本の古神道に近い大倭教のいわば神域である。そこへ出自はキリスト教である団体がやって来て活動をし、しかも無償で土地を提供（私の知る限りでは、この土地にまつわる固定資産税を、その後もずっと大倭が負担をしている）し、後方支援はしても、一切活動には口出しをしない。

宗教というものの陥りがちな排他性とは、全く対極にある。

古来から日本では、信仰の違い自体による諍いごとは非常に少ない。実はこのことはこの地球上で、随分稀な地域であると思う。日本古来の八百万の神々を信奉する宗教の中に、仏教、そしてキリスト教が渡来したのである。

先頃、他界されたカトリック教の前ローマ法王

ヨハネ パウロⅡ世を狙撃した（八二年）トルコのイスラム教青年（終身刑により現在もイタリアの刑務所にて服役中）は、尋ねてきた日本人ジャーナリストにこう言ったそうだ。「自分はイスラム教徒であり、ローマ法王はカトリック教徒。しかしあの法王だけはそうした宗教を越えた存在だ」と（法王は自分を狙撃した犯人を、その後見舞ったそうである）。そして逆に訊かれたこともあり、それは次のような内容であった。「私は日本に強い関心を持っている。一つの国の中に色々な宗教があつて、何故何事も起こらないのか？」という質問であつたそうだ。

この日本でも、宗教が当時の国家権力と相対峙したことは、歴史上いくらでもある。日蓮は当時の権力に徹底して抗つたし、信長の叡山焼き討ち、キリスト者の受難の歴史は枚挙に暇がない。

しかしそれぞれの信仰の違いということでの宗教者間の組織的な流血の殺戮は、寡聞にして私は知らない。

もともと日本の宗教史の中にも、明治初期の廃仏毀釈といった天皇神話創作のための悲劇もあるにはあるが、むしろ昨年世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」では、日本仏教の最高峰の一つである高野山と熊野三社との「神仏を結ぶ古道Ⅱ修験道」がその自然の有り様と共に、世界から高い評価を受けた。

そしてこの大倭こそは、こうした日本の宗教の大らかさをものに見事に体現している宗教の一つであると思う。人それぞれ顔や形が違うように、入植者五名の気持ちもそれぞれである。しかし大倭への帰依を一気に加速した共通項として、こうした認識があり、当時の私達の魂を収斂させるといふ心象風景は、この一点にあつたのではないかと考えている。

（文中、敬称略）

### 御礼とお知らせ

秋も深まってまいりました。皆様には、健康の事と拝察いたします。

日頃は大倭紫陽花邑に、なにかとご理解ご協力いただき、ありがたく感謝申し上げます。

はやいもので来年二月九日がいりますと、法主様帰幽満十年になります。

お蔭様で、この度念願でありました法主奥津城石碑工事が完成のはこびと成りました。

皆様方のお力添えのたまものと感謝いたしております。失礼ながらここに紙面をもって御礼を申し上げる次第です。本当に有難うございます。

つきましては平成十七年十二月二十三日、日聖祭当日の午前九時四十分より法主様奥津城にて、完成除幕式を執り行いたいと思っております。

皆様のご参列をいただければ幸いです。

ここに御礼を申し上げますと共に、ご報告いたします。

大倭紫陽花邑

代表 矢追 家麻呂



とまれる魂の地を訪ねて(3)

平成17年9月2〜4日

### 陸奥国へ(下) 厨川柵址、平泉他を巡る

杉本 順一

9月4日、小雨の中8時30分頃ホテルを出発。厨川柵址、平泉方面に向かう。

この日の訪問を報告する前に、予備知識として少し書いておきたい。ただし過日、安倍貞任公がなぜ一族の供養を頼みに出てこられたのか、また私達の陸奥国訪問をなぜ知っておられたのか、そんな霊界のからくりは分からない。

【安倍貞任】 『日本史広辞典』(山川出版)より平安時代東北地方の豪族。……一世紀前半の忠頼・忠良父子以来、六郡(陸奥国北部、衣川以北の胆沢 江刺・和賀・稗貫 紫波 岩手の六郡)で俘囚(≒八世紀以降に律令国家に服属した蝦夷(※昨日お訪ねした胆沢のアテルイ、モレさん達の同属)の呼称)の長として勢力を振る。忠良の子頼時に至り、支配圏を拡大しようとして中央政府と衝突。このいわゆる前九年の役の過程で頼時および子の貞任は戦死。宗任(※貞任の弟)は捕虜となり……。

歴史で習った「前九年の役」の話が出てきた。これは一〇五一〜六二年に亘った戦争。安倍氏と国守の衝突が発端。陸奥守兼鎮守府將軍 源頼義が着任後、安倍氏はいったん帰順したが一〇五六年から全面戦争状態となる。苦戦をしいられた頼義は出羽国仙北の俘囚長 清原氏の助けをえて、七年後ようやく終結。この戦乱の過程で源頼義 義家父子と従軍した東国武士団の主従関係が強化され、武士団の棟梁としての地位安定につながった、とある。

これも朝廷軍と東北先住の人達との戦だった。時代は今NHKドラマにみる義経 弁慶時代の百二十数年前のこと。源義経の祖父(為義)の祖父(義家)時代である。

先ず盛岡市にある厨川柵址に行く事になった。小雨の中、車で行ける道を探して岸田哲、齋藤正宏、高橋良美、高橋延之さん達があちらこちらに走って尋ねてくれました。ようやく道が確認できて、車を止めていたコンビニを出発し厨川柵址に進んだ。

車を降りたら小さなお社が目に入った。赤い鳥居の××明神には行かず、その右にある貞任 宗任両公のお社に向かう。この日は神社のお祭り日らしく、氏子さんがたくさん集会所に居られた。小さな神輿が倉庫から出されるところだった。

貞任・宗任神社で、私は約束を果たすため、持参した大倭の水と奈良のお菓子をお供えた。

貞任さんの第一声は「ワレ カツテノヒトニアラズ」だった。私は 歴史に書かれただけの過去の人間ではない。今も厳然として霊界に存在しているぞ。そう叫ばれたように私は感じた。余りの語気の強さに圧倒されて、この言葉だけは直ぐに皆さんにお知らせした。

そのあと「ヨクゾ オイデクダサレタ カタジケナイ」との事。(かたじけない) 恐縮して、もったいないの意)

「神社の氏子さんの中に、安倍一族に詳しい方が居られるのだが、昨日の宵宮で酒を飲んでおられたので、今朝はまだここには出てこられんでし

## 日聖祭のご案内

平成十七年十二月二十三日(祝日)

大倭六十一年 元旦

法主日聖師のご誕生を

記念する祭典

- 午前9時40分、法主奥津城にて石碑完成除幕式を行います。
- 午前10時30分、大倭大本宮拝殿において日聖祭を行います。
- 午後1時より、大倭安宿苑長曾根寮 あじさい広場で祝賀の直会演芸会が催されます。
- 昼食は直会弁当を用意しますので、法主様と共に演芸会を楽しんでください。

- 今年も演芸会に出場される方を募ります。
- あなたのやりたい事をやって、共に楽しませてください。
- 十二月十五日まで受け付けています。

直会演芸会実行委員会

TEL 〇七四二一四四〇〇一一番

青山法義・中島武宣迄

よう」と厨川柵（通称安倍館）のお話をしてくださる方がいた。話を聞いているところに一台の単車がきた。今、噂していた「老人である。この人は安倍館町の星君夫さん（88歳）」と言われ、早速先の方から話を引き継いで私達にお話をさせて頂いた。

### 厨川柵について……

一〇六二年九月十五日、源頼義ひきいる官軍は、安倍一族が死守する厨川柵の陸を、近所の村落の家を壊して埋め、河岸には刈り取った萱を山のように積み大風を機に火を放った。柵は焼け落ち遂に安倍軍は敗れた。安倍宗任が捕虜になった後の話など、長い時間詳しく話を聞かせてもらった。別れ際に「安倍宗任謫居の地」（福岡県大島村発行※謫居Ⅱ配流されていること）の複写を自宅に戻ってまでして、プレゼントして頂いた。この中に「平家物語 剣巻」として、宗任公が都の外の源頼義の宿所にとどめられている所へ公家達が来て「宗任は夷人だからこの花は知るまい」とあざ笑いながら、梅の花一枝を折って「これは何の花か」と問うた。宗任は即座に答えて「吾が国の梅の花とは見たれども、大宮人はいかが言うらん」と。しらけた公家達は、こそこそと引き揚げていったと言う。宗任公の見事な一本勝ち……

いろいろ話して頂いた星翁にお礼を言つて厨川柵址を出発する。

次は平泉を目指した。集合場所に3台が揃うのに30分くらいの差があった。「武士はくわねど……」ではないが、皆さんは麵類が中心の昼食、私だけうな重、朝ご飯をパスしたものでね。

昼食後、先ず武蔵坊弁慶大墓碑に挨拶に行く。合掌すればいきなり「ワガミ ココニアリ」との事、ここが言い伝えどおり武蔵坊のお墓らしい。次いで「ココニコモリテ イクヒヤクネン ワレ

シルモノワ イクニンモナシ」と言われる。武蔵坊が今も幽界に実存する事を知つて、墓に参る人の如何に少ない事か」と我々に伝えてこられた。「ホウシュノチカラヲ シメシテクレマシタ」との事。武蔵坊が喜ばれた事だけは分かった。次は工藤美代子さんの提案で、高館に歩いてゆく。

この高館は判官館とも言われ、兄頼朝に追われ藤原秀衡をたよつて落ち延びた源義経公の居館があった所と言う。また一一八九年、秀衡の子泰衡に襲われた所で、弁慶立ち往生の故事もある。また、ここから北上川の向こうに鎮座する東稲山が見える。一一八六年、平泉を訪れた西行法師がこの山を眺めて、「ききもせず東稲山の桜花吉野の外にかかるべし」と詠んだ。そこは安倍貞任公の父頼時が一万本の桜を植えたと言われる桜の名所だったとの事。

一六八九年、松尾芭蕉も「奥の細道」の旅の折、ここに登り、平泉の榮枯盛衰に思いをはせて「夏草や 兵共が 夢の跡」の句を残した所。

高館は小高い丘の上にあるらしく坂を登り始めると藤田啓子さんの足が止まって動けない。娘が藤田さんがおかしいと言つてきた。坂の左側を見ると「往古両軍戦死者供養塔」が目に入った。ここが鎮魂と慰霊の場所と直感した。

持参していたお菓子とお水で挨拶をした。延之さんが、お酒を供えてくれた時、「ホウシュノココロ」と聞こえた。ここでは沢山の想念がガンと胆に来る。藤田さんも歩けるようになったので眺望平泉第一と言われる山頂に立つ。北上川の流れる雨で曇っていた。ここで感応した「ワガミ ココニアラス」とは何を意味する言葉であろうか。10年前、大倭グループの旅行の時、「悲しや悲し 陸奥へ大和より来し道のりは 心底苦し 譽

の果てに」と私に語つた義経公に思いを残して、中尊寺に向かう。月見坂はけっこうしんどかった。金色堂に入ったのは10年ぶりであった。堂の中で頭痛を起こした人もいたが……

一関で青森 東京組の皆さんとお別れして帰りの時刻を気にしつつ、花巻空港に急いだ。空港で再び車で日本海コースを取る齋藤さん、高橋 見田さんとお別れした。

15分遅れで午後9時前大阪空港に着陸。10時過ぎ邑に無事ついた。

拜殿へ帰邑の挨拶に上がる。

「ウツシヨノミナニ カンシヤモウシアゲル」と、ご丁寧な法主さんのお言葉だった。

「オカゲニテ（と、3回くり返して）モウオモイノコスコトナシ ウツシヨノカタガタワスガスガシヨココロナリ」とアテルイさんのお言葉であった。

9月5日になって、旅行中お言葉の少なかつた坂上田村麻呂さんは今の心境を、「ムナシキワヒトノミヨキル ホネヲキル」（虚しきは 人の身を斬る 骨を切る）と。清水寺を創建された時の心境である。

共に行った筈の桓武天皇は、3日の胆沢の事について「コトノハニ イタスベキ ヒニアラス」との事であった。3日の時機、状況を心得たお答えである。

旅行中運転してくださった皆さんには大変お世話になりました。そして共に旅して頂いた皆さんありがとうございました。

この旅の記事を読んで、霊界人（皆さん自身のご先祖をはじめ）がいかに私達現界人に對し、いつも心を向けておられるか、その事を感じて頂ければありがたいと思います。この事が分かれば、それが真の先祖供養の第一歩だと思えます。

# 寸 莎

## 第67回

たん ぼ とし みち  
反 保 利 通 さん



### 明るさが本質

今回登場してもらうのは、大倭生まれで、現在は大倭印刷の印刷 製本部門の責任者である反保利通さんである。寡黙な第一印象を与える利通さんだが、じっくり話してみると、さわやかな明るさを内に秘めた人柄が感じられて、話が弾んだ。

利通さんは昭和三十六年二月十九日に、反保隆臣さんと良さんの間の、上に三人の姉がいる長男として生まれた。誕生時にこんなエピソードがある。——今年のはじめに解体された双葉館で産声をあげたのだが、知らせを受けてやってきた法主様が、玄関に入るなり、「利通が生まれたのう」と言ったとのこと。法主様の中では、すでに名前が決っていたのだ。母親の良さんは、当時大倭安宿苑の救護施設の厨房で働いていて、子育てに専念できなかったので、「ま

わりの人達が手分けして面倒をみてくれて、本当に助かった」と語る。

幼少の頃の思い出として、「姉達から『よく喋る子やな』と言われていたけれど、いつの間にかあまり喋らなくなつた。多分、自分が男一人で、姉や妹達の女性軍に圧倒されたからかな」と利通さんは笑う。

小学校時代から体を動かすのが好きで、「自転車で走りまわったり、鉄棒に熱中したりした」という。中学生になると、「ブルースリーの影響を受けてヌンチャックの練習をしたり、腹筋体操に打ち込んだりした。卒業してからは、アクション俳優の養成所の試験も受けた」というから本格的である。

富雄中学校を卒業してから、すぐ到大倭印刷で働きはじめ、同時に奈良工業高等学校の夜間の機械科に通つた。しかし、「学校の雰囲気にもなじめなかつたし、夕方四時頃に、

皆がまだ仕事をしているのに、仕事を置いて出ていくのがいやで、一年で退学してしまつた。

印刷で働きはじめてからは、両親の家から離れて、当時印刷工場の二階にあった「若者部屋」に移つた。

「部屋が隣だつた同年代の大滝哲也くんと仲良くなつて、お金がなかったので、京都などを二人でひたすら歩きまわるのが休日の遊びだつた」とその頃をふり返る。

利通さんが二十歳になつた頃、大滝さんが、菅原園の寮母として働いていた石田由美子さんを紹介してくれて、「藤ノ木台一丁目のバス停の前にあつた喫茶店『カールア』ではじめて会つた」。四年間交際した後昭和六十年四月二十八日に玉姫殿で結婚式を挙げた。翌年には長女の奈緒美さんが生れて、今では三女の父である。「子供の時には姉や妹に囲まれ、家でも女ばかりで……」と半ば嬉しそうに頭を掻く。

若い頃から一貫して大倭印刷の現場で働いてきたが、「最近では以前と比べると、仕事の質の高さが問われるようになり、技術的にもむずかしくなつた」と悩む。利通さんの上司で工場長の青山法義さんは、「彼の几帳面な性格で印刷の仕上がりを厳しくチェックしてくれるので助かる」と言い、「若い人に仕事を上手に任せ

ながら見守るといふ姿勢なので、現場での信頼も厚い」と評価する。

利通さんにとって法主様とは、と問うと、「父親やオジイちゃん（青山日元さん）は怖い存在だつたが、法主さんは神さんに近いという感じで、目に見えない世界のことも含めて色々なことをわかりやすく教えてくれた人だつた」と答えてくれた。

青山法義さんによれば、「彼は普段はおとなしく見えるが、酒を飲むと、陽気によく喋る。以前に法主さんは『その明るさが利通の本質や』と語つたことがある」とのこと。

現在住んでいる広陵町の的場地区で、最近では自警団の団長を務めたりする経験も積んで、「人前で喋らざるをえない機会も増え、自分が大分変つてきたのを感じている」と話すのを聞くと、利通さんの本来の性格が開花ははじめているのではないかと、思つたりする。

これからの生き方としては、「家族のために頑張つていきたい。昨年は胃かいようで二週間入院してしまつたが、今後はもっと健康に気をつけていきたい。それに、大倭での人と人のつながりも大切にしていきたい」と明るく胸を張る。

血液型はB型。歌はナツメロからポピュラーまで、聴くのも歌うのも好き。  
(聞き手 岸田哲)

# AWTCC日誌

10月14・15・21・23日 大倭病院では職員懇親のため二班に分かれて神戸 有馬温泉方面へ一泊旅行をしました。

10月15日 大倭神宮月次祭。雨のため社務所での祭典となりました。

10月19日 突然、古代史研究をされている伊ヶ崎淑彦 北村正信の両氏が来邑。先到大倭神宮に行かれたそうで、紫陽花邑では杉本順一 矢追房子さんが応接。饒速日命、長曾根日子命などに関心をお持ちとのことでした。

10月20日 法主奥津城の石碑が建立され、先の標木は瑞光院で保存される事になりました。

夜、中島家では故中島康治さんの帰幽2年目で、お祭りが行われました。

10月23日 大倭大本宮月次祭。

10月25日 夜、本紙編集会議が行われ、新年号特集について話し合いました。選ばせて頂いた皆さんが、原稿を送ってくれますように!!

10月29日 午前10時30分より奈良パークホテルにおいて邑交會。しんごい話が多い昨今ですが、この日はいくつかの部署から明るい話も聞けました。

10月30・31日 大倭会秋の一泊文化行事で、変則参加を含め総勢48名が丹波 丹後地方を訪れました。2日目、朝食中の旅館へ、元須加宮寮職員で郷里に戻っておられる済木宏司さんが、『おおやまと』で見たと訪ねて来てくれ、一同感激。平成15年の新年特集に原稿を寄せてくれます。家は旅館から3キロ程、子供が3人、老人福祉の仕事をしてもらえるそうです。

他、詳しくは12月号で報告。とりあえず宴会での昇ちゃんのカヌーのパドルさばきの写真を（今夏初めてのカヌー体験がよほど嬉しかったのでしよう、笑えるよりは一生懸命の演技）



野保夫さん写

10月30日・11月10日 F I W C 関東委員会が中国に派遣し、関西委員会も支援している原田僚太郎君が帰国中で交流の家に滞在、報告会や色々な交流がありました。中国のハンセン病回復者の村を社会復帰先として考えている星塚敬愛園（鹿児島県）の小牧義美さんという方もずつ

と一緒でした。11月3日 田んぼで脱穀。初めて来てくれる人もあり、大勢の参加者がありました。途中、雨がばらつきましたが、幸い妨げられるほどでなく順調に終了、大倭会館に戻って昼食会をしました。今年の収穫は昨年より少なかったそうで、1年分の神さんのお供えには足りないかもしれないが、とのこと。そして翌4日には、早くも来年に向けて、高橋良美さんはじめ有志が田んぼに広げたワラやモミガラにEMを撒く作業をしてくれました。

11月6日 大倭神宮月次祭。この日も雨のため社務所において祭典が行われました。午後7時30分より大倭会館において邑倭の会が開かれました。

本紙今年の8月号「こめれる魂魄の地を訪ねて（21）」中の「浮島丸殉難者を追悼する会」会長の野田幹夫さんが帰幽されたと、舞鶴の藤本宏秋さんから知らせがありました。4月3日にお会いして浮島丸殉難のお話をして頂いたばかりでした。不思議な邂逅に感謝いたします。

11月8日 大倭印刷（株）に、近々3日間の職場体験に来る予定の富雄南中学2年の男子2名が、打ち合わせに来ました。

11月10日 吉澤秀子さんが大倭殖産（株）を退職されました。

長年お疲れ様！大倭安宿苑では（菅原園）10月15日 長居競技場でJリーグのサッカー観戦をしました。10月16日 奈良養護学校卒業生数名が同窓会に参加しました。（須加宮寮）10月20日 ホットプレートトのシーズン到来でお好み焼の昼食を楽しみました。（長曾根寮）10月20日 誕生会。運動会のフオークダンスの練習も。10月30日 紅白に分かれ玉入れ、風船バレーなどの競技を工夫しての室内運動会をしました。（八重垣園）10月19日 午後のひととき「冬景色」「青い山脈」「りんごのうた」で、コーラスクラブ。11月10日 障害者の作った作品を販売する等の「まほろば 楽市 楽座」という、ならまち界限での催しに6名が参加。

## 編集後記

▼10代の頃より『すさのお』『おおやまと』を印刷（屋）としての立場で関わらせてもらってきたが現在は編集部IT部？の一員として関わらせてもらっています。Webにも書いた事がありますが法主さまの残された貴重な録音テープを少しでも多く聞いていただけるよう努力いたします。（のん）

★金鶏祭（大倭神宮）12月4日（日）午後2時より大倭神宮にて。金鶏祭は、九州勢（神武側）が長曾根邑を攻めた際、天に示された金色の奇瑞によって両軍が戈を収めたことを記念する祭典。この金色の奇瑞を金鶏といひ、和の光の象徴となっている。『やわらぎの黙示』百二十三頁「日本精神の源流」―長曾根邑のすめらみこと―参照。

# ATMIC

★月次祭（大倭神宮）12月6日（火）午後2時より大倭神宮にて。

★大倭会主催第四四五回祝会12月11日（日）午前9時より恒例「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。

★月次祭（大倭神宮）12月15日（木）午後2時より大倭神宮にて。

\* 日聖祭（大本宮拜殿）及び直会演芸会

12月23日（祝日）大倭元旦。午前10時30分より祭典、午後1時より直会演芸会。（5頁参照）

\* 大倭神宮境内・周辺大掃除12月25日（日）午前10時より行います。有志の皆さんはご参加下さい。昼食はお弁当が用意されます。

（8）